

「お客人、心配御無用でごわす」

TEKNA(こどもたち) クリスマス号2008

森泉弘次

「テクナ・クリスマス号」が皆さんの手に届くころには、アドベントは最後の週に入り、クリスマスも目前に迫っていることと思います。この時節に、旧約聖書の中でもっとも福音的な書と言われるイザヤ書のインマヌエル預言すなわちイエス・キリストの誕生預言の言葉を学ぶことは意義あることと思います。

(1) 預言者イザヤの活動初期；南ユダ王国の危機的状況

ソロモン王没後、イスラエル王国が南北王朝に分裂して(前922)以来、南ユダ王国は十二代目のアハズ王の時代(前735-715)に入り、北イスラエル王国は第十八代目のペカ(前737-732)が支配していました。イザヤが預言活動を始めたのは、ヘッシェルによると、ユダ、イスラエル(=エフライム)両国にとってきわめて危機的な時代がはじまってまもないころでした。当時ユーフラテス川東南に広がるアッシリア帝国が、強大な武力を背景に中東諸国を支配下に置こうと虎視眈々と狙っていました。「アラム王レツィン」というのはダマスカスを首都とするシリアの王であり、前記北イスラエル王ペカは首都サマリアに城をかまえて、ダマスコのレツィンと反アッシリア同盟を結んで、加盟を拒むユダに侵入してきました。いわゆる「シリア・エフライム戦争」(前73)です。

侵入の報を聞くやアハズ王と民の心は「森の木々が風に揺れ動くように動揺した」とあります。彼は大国アッシリアに服属して難を免れようとします。国の独立を他国に譲り渡すことになることも考えずに。パニックになると、人は前後の見境(価値序列の判断)がつかなくなり、とんでもない誤りを犯し、自滅の危機に瀕します。これは昔も今も変わりません。これまで経験したことのない政治的、社会的変動(昨今の100年に一度の大金融恐慌のような)や個人的不運(大事な入試に失敗したり、重い病を告知されたりしたときのような)、に見舞われると、人は誰でも心が怖れて動揺します。そうしたときに物言うのが信仰だとわかってはいても。

(2) 神の語りかけ 「信仰を貫かなければ、信用ゼロで破綻する」

アハズ王と民のパニック状態を見て、神はイザヤをとおして命じました。4節「落ち着いて、静かにせよ。怖れるな」(ヒシャメル、ヴェアシュケット。アル ティラー) 原語ヒシャメルは「注意深くあれ」で、「この際、何をすることが一番大切か慎重に判断せよ」を意味し、きわめて具体的な誠めであります。「静かにせよ」は、「祈って神の御意思をうかがえ」を意味し、同じく具体的です。最後の命令は、英語で表現すれば、**Don't be terrified**です。ティラーはテロと語源的に関係があります。あなたが怖れる両王は「燃え残ってくすぶる切株」にすぎぬ。ユダの王の首を自分らに都合よい首にすげ替えるというもくろみは実現しない、破綻する。

9節の「信じなければ、あなたがたは確かにされない」は、ややもたもたした訳し方で

原意を伝えていません。むしろ「信じなければ、あなたがたは持ちこたえられぬ」と訳した方がいい。原文の「イム（もしも） ロー（ない） タアミーヌ（信じる） キー（そうなら） ロー（ない） タアメーヌ（最後まで持つ）」は、下線部が同じ韻を踏んでいて、どちらにもエメット（真実、忠実、信仰）という言葉がはいっています。同韻を活かしてパラフレーズすれば、「信仰を貫かなければ、あなたがたは信用ゼロで破産する」です。

ルターはズバリ「信じないなら、留まれぬ」と訳しています。では、どこに留まれないのでしょうか？ 「インマヌエル（14節）という名前を持つメシアの下に、でありましょう。イスラエルの民とともに、すべての人々と共にいます神、彼らと共に、われわれと共に連帯し、その運命を徹底的に引き受けられた神への信仰を貫くなら、その慈愛のうちに留まることができる、ということでありましょう。

（3）幸せは、悠然と待ちつつ、黙々となすべきをなす人に

北側はシリアとエフライムに、南側はエドムとペリシテに挟み撃ちにされ、頼りにする超大国アッシリアは独立を脅かすかのように睨んでいる恐るべき状況下にある、ユダの民のために、世界のために、主は700年後に成就される神の独り子、イエス・キリストの誕生を用意されました。預言したイザヤ自身は彼の存命中にその予言は成就されると信じていたでありましょう。彼も「神様、いつまで待たせるのですか」とつぶやくことがあったかもしれません。しかし、神の言葉は必ず実現します。「天地は過ぎゆかん。されどわが言葉は永遠に変わることなし」であります。そうした信仰の希望の在る無しで人生は大きく分かれます。信じて悠然と待ち、黙々となすべきをなし続ける人に幸せは来るのです。

（4）ビスマルクとトロイカの御者の出会い

19世紀後半に活躍し、それまで多くの領邦国家に分裂していたドイツを統一する原動力となったビスマルクというプロイセンの首相がいました。首相になる前の1959年ロシア駐在大使としてペテルスブルクに派遣されたときの興味深いエピソードがあります。

単身トロイカに乗ってロシアの首都に赴いたのですが、吹雪に阻まれ、なかなか目的地に着く気配がありません。夜の帳（とぼり）も降りてきて、予定時刻に大幅に遅れるのではないかと、気が気ではないビスマルクは、黙々と三頭の馬に鞭をくれる壮年の御者に、「政府の高官との重要な会談の予定があるのだ。予定時刻に間に合うだろうか？」と、何度も聞きただすと、御者は「お客様、心配御無用でござす」と一言答えたただけでした。その一言で、ビスマルクの不安は鎮まり、うたたねをしました。「旦那、着きましたぜ」という声に眼を覚ましたビスマルクは、トロイカが無事予定時間内にペテルブルクの大使館前に着いていたことに気づきました。下車する際、にっこり微笑んで、ロシア語で「スパシーバ」と礼を言って、チップ込み運賃として、ルーブル紙幣の厚い束を御者に握らせたことは申すまでもありません。

では皆の衆、クリスマスはもうあの町角まできておりますので万事心配御無用でござす。